

「なんや、久七やて、これ婆さんお店に居た、アノ久七さんやて」

「オ、それ〱家に居て、アノお花が死んで葬式の晩に行衛の知れん様になつた久七どんや」

「成程夫ふか、久七とんで思ひ出したが、家に奉公人も仰山使ふて見たが、物を置いて出たのは、お前ばつかりや、外の者等は皆物を持つて逃げて出る者が多い、お前さんの荷物はチャンと荷造りをして京の家に預かつてあるで、私が歸り次第に送らせませす。イヤモウ此様に出世をせられたのも常からお前さんの心掛けが宜い故、マア此んな目出度いことはないナアお婆さん」

「就きましては、お兩方^{ふたかた}に是非御覽に入れねばならぬものが御座ります。どうぞ奥へお通り下さりまして、御ゆつくり御休みを願ひます」

久七の案内で奥の座敷へ通りました。結構な座蒲團の上に座らしまして、お茶よ菓子よと厚い饗應^{もてなし}を受けて居ります。暫くすると以前の久七が袴姿で、お花を奇麗に着飾らせまして連れて参りまして、兩人の前に手をつけて、

「さて旦那様、何からお話を申し上げました宜らしいやら、實は爰^{こゝ}に御座るのは嬢さん^{むすめ}で御座ります」

「エー嬢やんと仰しやるのは」

「ハイ、貴君^{あなた}様の嬢様お花さんで御座ります」

「お父様とお母様お久し振りで御座ります。お達者^{たつしや}でお變りもなう、こんな嬉しい事は御座りません」

と叮嚀^{ていれい}に挨拶を致しましたので、忠兵衛夫婦驚いたの何のて夢では無いかとばかりに

「ナンヤ、家の娘^{むすめ}のお花やと、これ婆さん、娘のお花やとほんまかいな久七さん、ほんにお花や、お

花や、お……は……なや、これ婆さん」

「エー、あのまあ、お花や、能うまあ達者^{たつしや}で居て呉れた」

「これはまあ一體久七さん、何う云ふ譯で御座ります。全然^{まづ}で夢の様ぢや」

「へい、お驚きは御尤^{ごもつと}もで御座ります。是れは是々斯々^{これこれ}の次第で御座ります」

以前の話の一份一什^{いちぶし}を物語りますと、忠兵衛夫婦は夢に夢見る心地をして、娘の手を取り合ひ嬉し涙にくれて居りました。

「御兩人様に喜んで頂きたい事が御座ります。子供が出来まして今年三歳になります」

「何や子供が出来た、これ婆さん赤坊^やが出来たんやと、そして男か女か」

「ハイ男で御座ります」

「男か偉いな、早う孫が見たい。見せとくれ」

「これ」